



古典を学ぶ

いよいよ古典の授業も開始である。今年は、1年生の現代文を2クラス（12Rと16R）、古典を2クラス（13Rと17R）、そして3年生の文系必修選択の古典（のうち、古文3時間）を2講座担当する。

3年生の古文は、文系の必修選択であり、『枕草子』から始まって、最終的には『源氏物語』を読み進む週3時間（漢文と合わせると5コマ5単位）の授業である。当然のことながら、国公立大学の二次試験までを視野に入れることになるから、かなりハイレベルな展開となる。

一方、1年生の古典は、それこそ入門の授業になる。中学校でどの程度取り組んでいるのか分からないし、また、中学校によっても熱の入れ方（抜き方？）がバラバラなので、基礎の基礎から始めて、全員が同じレベルに達することを目指す。ちなみに、次の時間（つまり今日の7限）にやるのは「歴史的仮名遣い」であり、現代とは異なる古典の仮名遣いをどう読んだらよいのかという話である。すでに勉強したことがある人もいるだろうが、「仮名遣い」といった言葉の意味からはじめて、確認すべきことを整理するので、油断なく取り組むこと。

しかし、例えば今日の2限は3年生の授業（『枕草子』「宮に初めて参りたるころ」をやり始めた）であり、5分休みをはさんだ3限は17Rの授業ということで、その短い間に頭を切り替えるのが大変なのである。3年生の授業では、習っていることを前提にして話していることが、当然のことながら1年生ではまだ全く触れていないなどということがある訳で、それが結構面倒くさいのである（笑）。

*

昨日の授業でも話したが、古典は完全にリーディングの世界である。しかし、それには重大な意味がある。

そもそも何故古典などを学ぶ必要があるのか？ 身も蓋もない言い方をすれば、それは「受験科目にあるから」ということになるわけだが、ではなぜ受験科目に古典があるのかということだ。

平成元年から一緒に教科書編集の仕事をしている室城秀之先生（白百合女子大教授・日比谷の卒業生）が、その教科書にこんなことを書いていらっしやる。

*

古文は、言葉によって残された文化遺産である。絵画などと同じように形のあるものではあっても、私たちは読むことによってしかそれを受け継ぐことができない。しかし、いざ古文を読もうとすると、そこには、仮名遣いや文法、語彙など、現代語とは異なるものが多く含まれていて、とまどうことになる。そして、古文を読むためには、古文の言葉に対する正しい認識と理解が必要だということに気づく。（中略）

古文を学ぶことで、現在の私たちが古代から伝統の中で生きていることを知る。このような体験をすることによって、古文という、古代から続く文化遺産を、更に未来の人々へと伝えることができるのである。

*

我々が古典を学ぶことは、未来世代へ文化を伝えていく「責任」を果たすことでもあることが分かるだろう。しっかり学ぼう。